

令和8年1月14日 総合政策委員会 開催状況

開催年月日 令和8年1月14日(水)

質問者 民主・道民連合 広田 まゆみ 委員

答弁者 官民連携推進局参事

質問要旨	答弁要旨
<p><b>二 ほっかいどう応援団会議について</b></p> <p><b>(一) 佐賀県モデルを参考にした「NPO 指定型ふるさと納税」の導入等について</b></p> <p>先日、NPO 法人テラルネッサンスという5億円以上の寄付を集め、カンボジアでの地雷除去や、ウガンダで元少年兵の回復帰プログラムを行っているNPO 法人にお話を聴く機会がありました。そのなかで、どうしてそれだけの資金調達ができるのかというふうに伺ったら、佐賀県の取組によって、佐賀県では、寄附者が応援したいNPO を直接指定し、その寄附額の約9割をその活動に充てられる仕組みがあって、全国から多額の資金と共感を集めていることを知りました。</p> <p>私は、本道の課題解決には、独立型太陽光発電によるエネルギー自立や、藻場の再生を通じたブルーカーボンの推進など、高度な専門性や知見を持つ組織が必要であると考えています。佐賀県が「資金調達の仕組み」を武器に全国の有力NPO を誘致しているように、道も「北海道の広大なフィールド」と「ふるさと納税による活動資金」をセットで提示し、脱炭素や環境保全を担う専門組織を戦略的に道内へ呼び込むべきではないでしょうか。</p> <p>カニやイクラといった「モノ」の返礼品競争に終止符を打ち、例えば、「北海道の湿原を守る」「地域のエネルギー自立を支える」といった「ミッション(使命)」への共感で寄附を募る「NPO 指定型ふるさと納税」を導入すべきではないかと考えますが見解をうかがいます。</p> <p><b>(二) 「ほっかいどう応援団会議」について</b></p> <p>応援団会議のネットワークなども活用するということがありますが、ほっかいどう応援団会議について、以前もご議論させていただきましたが、知事公約でもあります「ほっかいどう応援団会議」を、交流の場から、「地域課題」と「研究者の知見」、「企業がお持ちの資金や技術」を結びつけるマッチング・エンジンへと深化させるべきではないかと考えます。</p> <p>先ほど、30BY30の話もしましたが、OECM、保護地域以外で生物多様性に資する地域、湿原周辺のところとか、そういうところが今回いろいろな議論の元になっていたということで、事態が起きてから動くのだと対応が遅くなるので、先にそこを保全しておくということが必要なんですね。そういうOECM を登録・認定していく際、応援団会議に参画する企業がその管理運営などをNPO 等と協力して支援する「北海道版の社会的投資モデル」を確立できないでしょうか。すでに、こうした事例は北海道遺産などにも例がありますので、現在は、植林や清掃活動により社会貢献していただいている連携企業のみなさんに新たな選択肢を提示する意味も道の役割だと考えますが、見解をうかがいます。</p>	<p><b>(官民連携推進局参事)</b></p> <p>ふるさと納税の活用についてであります。道では、これまで、ふるさと納税の募集において、幅広い分野の事業をお示しするとともに、その時々課題や社会情勢を踏まえ、北海道に想いを寄せていただいた方々から共感を得られるような取組に活用することが重要との考えのもと、ふるさと納税を活用し、市町村や様々な団体等が行う地域振興や教育分野などへの支援に取り組んできたところでございます。</p> <p>引き続き、自然環境の保全をはじめ、本道を取り巻く課題の解決に向けて、他自治体の取組事例も参考にしながら、関係部局との連携のもと、ほっかいどう応援団会議のネットワークなども活用し、より多くの方々から共感や賛同をいただきながら、取組が進められるよう努めてまいります。</p> <p><b>(官民連携推進局参事)</b></p> <p>ほっかいどう応援団会議の取組についてでございますが、地域が抱える様々な課題の解決に向けては、多様な主体の参画の下、地域の支援ニーズと企業等の応援ニーズのマッチングを強化していくことが重要でございます。</p> <p>このため、道では、市町村長などが地域の魅力や課題を発信し、企業等に対して応援を呼びかける「ほっかいどう応援セミナー」を東京や大阪、札幌など道内外で開催するほか、官民交流サロン「こねくと」において、民間資金の活用を促進するための市町村向けセミナーや幅広い地域課題をテーマとしたマッチングイベントを実施するなど、様々な手法を組み合わせ取り組んでいるところでございまして、引き続き、自然環境の保全や脱炭素化の推進などの地域課題の解決に向け、多様な主体との連携が進むよう、取り組んでまいります。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p><b>(三) モノからミッションへの転換について</b>  マッチングイベントなどを丁寧に取り組んでいらっしゃることは承知をしていますけれども、「ほっかいどう応援団会議」は、現在1,000社を超える企業等が参画する大きなプラットフォームとなっていることは、皆さんの努力の結果だと思えますが、その実態は情報発信や緩やかなネットワークに留まっているというのは、もったいないのではないのでしょうか。</p> <p>繰り返しになりますけれども、応援団会議のメンバーの皆さんが、単に「北海道を応援する」という抽象的な形だけではなく、具体的な「ミッション（使命）」に対して寄附や技術提供ができる仕組みを構築すべきと考えますが、見解をうかがいます。</p> <p>例えば、「釧路湿原の環境トラスト」「離島の独立型エネルギー自立」など、道が認定した特定のプロジェクトに対し、企業版ふるさと納税や個人寄附をダイレクトに繋ぐ「プロジェクト・マッチング」としての機能を付加することも、検討すべきと考えますが見解をうかがいます。</p> <p><b>(四) ほっかいどう応援団会議のあり方について</b>  最後の質問になりますけれども、応援団の皆さんのニーズに応えるということも重要ですし、プロジェクトベースということで、各部の様々な事業があって動いていくというスタンスも一定承知はしますけれども、道としての総合計画を所管する総合政策部としての軸みみたいなものを、私は必要になってくるんじゃないかなと思っています。</p> <p>ほっかいどう応援団会議のあり方についてですが、先ほどの水資源の質問で申し上げましたが、環境省は、地域自然資産法に基づき、都道府県や市町村が「地域計画」を作成することで、自然環境トラスト活動を促進することを推奨しています。昨今、例えば京極町ですとか、あるいは釧路のトラスト運動をしているNPOに対しても、かなり更地等の寄附が来ていると伺っています。SDGs 未来都市、もう忘れているかもしれませんが、SDGs 未来都市である北海道において、湿原や森林といった貴重な自然資本を次世代に引き継ぐため、この「ナショナル・トラストの手引き」を市町村や道内のNPOへ積極的に普及・活用するなど、土地の取得・管理を道が技術的・政策的に支援していくこともあわせて必要だと考えます。</p> <p>先ほどお話をした、水資源条例による「規制（守り）」とセットで、応援団会議を「志ある主体による土地の共同保有」を支えるプラットフォームへと進化させることもご提案をさせていただきたいと思えます。</p> <p>不適切な開発が懸念される水源地や湿原を、応援団会議のメンバー、企業や個人の皆さんからの寄附によって、信頼できる地元のNPOや財団が買い取る「ナショナル・トラスト」を道が全面的にバック</p>	<p><b>(官民連携推進局参事)</b>  応援の具体化に向けた取組についてでございますが、道では、これまで、応援団会議のネットワークを活かしながら、応援セミナーの開催や官民交流サロンの活用のほか、ゼロカーボン北海道の実現に向けた取組をはじめ、道や市町村が支援を求める具体の取組をまとめた事例集を活用し、積極的な企業訪問等により支援を働きかけるなど、具体的な提案に努めてきたところでございます。</p> <p>今後も引き続き、様々なマッチング手法を活用しながら、北海道を応援したいという方々のニーズに応じて、道や市町村が抱える様々な課題や取組を整理し、プロジェクトベースでわかりやすくお伝えすることにより、資金面での支援や企業等との協働活動の拡大などにつなげてまいります。</p> <p><b>(官民連携推進局参事)</b>  今後の取組についてでございますが、ほっかいどう応援団会議は、北海道に想いを寄せる方々の知恵と力を結集し、地域の活性化につなげていくために立ち上げ、この間、1,700を超える企業・団体、約2万人の個人の皆様に参加いただくなど、多くの企業・団体や個人との幅広いネットワークの構築を進めてまいりました。</p> <p>これまでも、自然環境保全の取組に対する寄附等、目に見える取組に加えて、地場製品の消費拡大や市町村の地域づくりへの支援など、「北海道を応援したい」という想いを広く地域の活性化に結びつけられるよう取り組んできたところでございまして、今後とも、応援の輪の拡大を図りながら、官民連携による様々な取組を着実に積み重ねてまいります。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>アップすべきではないでしょうか。これは、単なる自然保護ではなく、「北海道の土地を、北海道を愛する人々の手で守り抜く」という、地域の安全保障に基づいた共創モデルになります。</p> <p>「ほっかいどう応援団会議」の再構築とは、単に登録者数を増やすことではなく、「行政だけでは決して守りきれない広大な北海道を、民間の資金・知恵・情熱で共に守り抜くこと」につながると考えます。</p> <p>「悪質な開発は条例で断固阻止し、価値ある自然は応援団会議を通じて世界中のファンと共に守り育てていく」。この「規制」と「共創」のダイナミズムこそ、SDGs 未来都市・北海道が歩むべき真の姿ではないかと考えますが、今後の応援団会議のあり方について再度見解をうかがいます。</p>	

